

大陸のそれ以外の地域^{7c以降}でも使われなくなる。一つの仮説として考えられるのは、それらの地域のケルマン人たちが7cより表記手段としてルーン文字を捨て、ローマ字にアルファベットを収める方向へ舵を切ったのではないかと推定される。7c後半から8cにかけては、ロビンソン・カリブーとフリーゼンとの間に水運権益をめぐって海覇権闘争がくりひろげられる時代であり、またライン川の東には、司教座都市マストリヒトの一連の司教たちが、都市住民に追放や殺害の憂目にあっていること示されるように、司教の力が非常に不安定で、またキリスト教化が浸透してはなからなかった時期にあてられている。アングロ・サクソンの宣教者たちがケルマン伝道に乗り出したのは、このような時代背景においてであった。690年にイギリス出身の先駆者ウルフワードが伝道団を結成して大陸へ渡り、エヒテツハ修道院を足場としてフリースラントなどで布教活動を行い、ロビンソンの庇護を得た。これは、この一門がフリースラント制圧に利用するためであり、それゆえエヒテツハ修道院は、政治的機能も担った。716年にはホーニテウスがフリースラントをめぐってイェーランドを出発し、のちにケルン、ヘッセル、バイエルン、アレマンネンなどでも布教を行っているが、ウルフワードと同様、彼も教皇の特別の許可を受け、司教の支配を受けずに布教したため、管区司教たちの軋轢や不和は避けようのない事態であった。彼は生涯の殆んどをドイツの宣教と教会の組織化に捧げるのであり、自らがキリストの教えに導かれたドイツの民に文字の形で福音の言葉を伝えることは彼の関心事の一つであった。文字記録への指向性を涵養している意味では、宗教伝道のみならず、文化伝道でもあったといえる。おおよそ彼の死んだ時期は、古高ドイツ語が最初に登場する時期と重なっているのである。

8cのアングロ・サクソンによるライン川東地域の布教には、ルーン文字から離脱したものの、まだ確立しきれていなかったケルマン人の地に表記体系を作り出すことが必要であったと思われる。古高ドイツ語の文字記録の最古のものは語彙集、祈禱文、信仰簡章であり、このことは、古高ドイツ語の表記体系の出現からドイツ地域でのキリスト教の布教に結びついてきたことを示唆している。アングロ・サクソン語に比べ、文字化が1cも遅かったのは、日常のメッセージの交換にはルーン文字を使ったので、ラテン・アルファベットを作り出す切実な要求を当初はもたなかったこと、ケルマン語が大幅に変動しており、方言が多種多様な部族集団に利便性に異なっていたために、統一的な表記体系を持つことがむずかしいことであろう。これが8cの本格的なキリスト教化の進行に伴い、一気に文字化が進んだと思われる。一番有名な「アフロカンス」という語彙集の最古の写本に収録されているのは、ドイツ語に限られているが、バイエルン方言はむしろあるとされている。

以上は、ドイツ語表記の出現からアングロ・サクソンによるケルマン伝道から生まれてくるという仮説に基づくものであるが、この問題に関しては、いせんとして多くのことが謎に包まれている。